

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成26年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の公民科受験者数（追・再試験を含む。）は205,461人で、昨年度比15,204人（6.9％）の減少となった。減少率は昨年度の9.0％に比べるとやや低下している。

各科目の受験者数の内訳は、「現代社会」が最多の77,904人（37.3％）、「倫理」は33,761人（16.2％）、「政治・経済」は48,389人（23.2％）、「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）は48,817人（23.4％）であった。昨年度比の増減を見ると、「現代社会」は5,611人（6.7％）、「倫理」は2,389人（6.6％）、「政治・経済」は3,518人（6.8％）、「倫政」は4,516人（8.5％）の減少となり、公民科のすべての科目で受験者数が減少することとなった。

「倫政」の平均点は、昨年度から6.61点上昇して67.29点となり、「現代社会」（58.32点）との差は8.97点、「倫理」（60.87点）との差は6.42点、「政治・経済」（53.85点）との差は13.44点となった。

教科内の平均点については、最も高い「倫政」（67.29点）と、最も低い「政治・経済」（53.85点）との差が13.44点となった。昨年度の平均点差5.22点と比較すれば差が大きくなっており、得点調整には至らなかったが、公民科各科目の作問の際、配点や難易度など、十分な配慮を望みたい。

公民科の目標には、「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。」とある。「倫理」で普遍的なものの考え方に触れ、自己や社会について考察すること、また「政治・経済」で社会を成立させる原理や制度、日本を取り巻く国際情勢を正しく理解し考察することは、社会の有為な形成者として必要な資質となり得る。混迷を深める世界や日本の現在の状況を考えると、「倫理」と「政治・経済」の双方を学ぶ意義はきわめて大きいといえよう。

センター試験では、こうした公民科の目標を受験者がどの程度達成しているかを問う出題がなされ、センター試験の受験が、受験者にとって人間としての成長を促すものであってほしいと考える。そのためにセンター試験には第一に、基本的な用語の暗記やその理解を問うだけではなく、思考力、判断力、応用力など様々な能力を試す出題であることが求められる。第二に、取り扱う課題が抽象的な理論だけではなく、受験者の実生活と深く関連する題材を取り扱うことが求められる。第三に、設問だけではなくそれ以外のリード文や資料などを受験者が読解することによって、社会情勢や現代の諸課題について熟考させるような工夫や配慮をすることが求められる。「倫政」の受験者の学習意欲を高めるためにも、これら三つの点について、今後とも継続的な努力を求めるものである。

以上のことを踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を行った。

(1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標・内容に適合しているか。ま

た、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。

- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力、判断力、応用力を問う総合的問題まで、バランス良く配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野については、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すよう工夫されているか。
- (5) 問題の難易度、出題方法、配点等が適切であり、各分野からバランス良く出題されているか。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等について

試験問題の内容等については、学習指導要領で学ばせることとしている「倫理」、「政治・経済」の各分野からバランスよく出題されていると考えられる。なお、第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。以下、大問及び設問ごとの出題内容及び難易の程度などについて記していく。

第1問 「フェアトレード」について（青年期の課題、現代の諸課題と倫理）

人類の福祉について考えさせるのに、経済のグローバル化が著しく進展している今日においては、国際協力や国際協調の面から、自分たちにできる身近なことについて考えさせることが大切である。受験者と年齢的にも近い大学生のコーヒーについての会話をとおして、生産者の自立支援の在り方について、「公正」の観点から様々な問題があることを気付かせようとするリード文からはメッセージ性を感じ取ることができる。倫理で「フェアトレード」について学んだ受験者は多くないと思われるが、このリード文からは現代の倫理的な諸課題について考えさせようとする工夫が感じ取れ、受験者にとって大変意義深い出題となっている。青年期の課題と現代の倫理的課題などが融合された大問となっており、全体的に無理なくまとめられている。難易度としては標準的な問題である。

問1 現代社会の分野にとどまらず、日本思想や現代思想などにまたがる出題であり、幅広い知識や深い理解が求められている。それに加えて選択肢も5つあり、やや難しい難易度の設問である。

問2 オルポート、マズロー、エリクソンの考え方をそれぞれ深く理解していなくても、Aの「成熟した人格」、Bの「欲求の階層構造」及びCの「自我同一性の拡散」という用語をキーワードとして、各具体例ア、イ、ウを読解することによって、比較的容易に解答を導き出すことができる。平易な難易度の設問である。

問3 センの「グローバル化をどう考えるか」からの引用資料に関する出題で、リード文の内容とも関連して極めてメッセージ性の高いものとなっている。現代の市場経済の在り方についてのセンの考え方について、受験者が理解を深めることができる出題である。標準的な難易度の設問である。

問4 19世紀以降のドイツ、イギリスの社会主義思想の変遷についての出題で、西洋近現代思想からの出題である。また、文章中の空欄 c のヒントとなる文章「そうした取組」が離

れて文末にあるため、空欄 **c** に「革命」が入ると誤解した受験者がいたのではないか。標準的な難易度の設問である。

問5 葛藤状況についての理解を問う設問である。レヴィンの「境界人」、シュプランガーの「性格の類型論」、「防衛機制」などの基本的な概念を理解していれば、ヤマアラシのジレンマについて知識がない受験者でも、解答を導き出すことができる。標準的な難易度の設問である。

第2問 「日本の思想に見る人間と自然の関わり」について（日本の思想）

現代の人間を取り巻く自然環境をめぐる問題は、学習指導要領の「(3)現代と倫理 イ 現代の諸課題と倫理」でも取り扱うテーマである。人間と自然の関係についての考察は、とすると科学技術に関わる資源・エネルギー問題や、世界経済に関わる開発の持続可能性にのみ、とらわれてしまいがちである。それは、人類と地球の未来を考えるという意味では当然のことなのだろう。気候変動の問題も生物多様性の問題も、国際会議の中でそれらを論じるまなざしは、人類と地球の過去ではなく未来を見つめている。

この大問のリード文では、時代とともに移り変わってきた、過去の先人たちの思索の中の人と自然の関わりを描くとともに、受験者がそれらを手がかりにして現在の自然観の問題点について問い直してみることを勧めている。科学技術とグローバル経済を、自然に対する敬意の観点から考え直すことは簡単なことではないだろうが、ハイデガーが存在をめぐるソクラテス以前のピュシスについて思索したように、日本の自然観から始まる根源的な思索もあり得るだろう。メッセージ性のあるリード文であった。設問については全体的にバランスよく出題されたやや難しい問題となった。

問1 董仲舒の『春秋繁露』からの引用文を読み、天災についての考え方として正しいものを選ぶ、「倫理、政治・経済」独自の設問である。もちろんテキストの正確な読解が必要だが、「天の思想」についての知識と理解も求められる、良質な資料文による問題である。選択肢も練られている良問で、標準的な難易度の設問であった。

問2 源信の思想についての理解を問う設問である。正解の選択肢の中に『往生要集』や「観想念仏」という用語を使うことなく、源信の思想が説明されているため、キーワードによる知識だけでは解くことができなかったであろう。また、慶滋保胤の『日本極楽往生記』についても、倫理の授業の中ではなじみが薄いため、やや難しい設問となった。

問3 賀茂真淵の著作についての知識を問う設問である。この設問も石田梅岩、契沖、安藤昌益らの著作についての学習が十分ではない受験者にとっては難しい設問となった。

問4 他者との関係性に関する様々な教えや思想の文章の正誤を見極める設問である。①は「法律」が「礼」であれば、③は「四苦」が「八苦」なら正解と言え、選択肢に工夫が見られる。④こそソクラテスの思想と理解できるが、全体としてやや難しい設問である。

問5 二宮尊徳の報徳思想、分度と推譲、天道と人道などの概念についてののしっかりとした理解を問う設問である。やや難しい設問だが、キーワード的な知識を問う問題や一問一答的問題にならないように工夫された良問であった。

問6 柳田国男、折口信夫、田中正造の思想の説明の中から南方熊楠の思想を選ぶ設問である。「神社合祀令」に対する南方の反対運動を知っているか、それぞれの思想を理解してい

れば正解を導くことができるオーソドックスな出題である。標準的な難易度の設問である。

問7 人間と自然との関わりをテーマにしたリード文の趣旨に合致する記述を選択する設問である。①の「伝統的な自然観がもたらした環境破壊の事例」と、④の「自然観は…自国の文化を批判することを通じて形成されてきた」という記述などは、不自然な選択肢であり、普通にリード文を読めば解ける平易な設問であった。

第3問 「西洋近代思想と芸術における想像力」について（西洋近現代思想）

近代の西洋における想像力の捉え方を、思想と芸術の両分野にたどるリード文である。ルネサンス期以降の自然の模倣や理性の重視から、18世紀のヒュームやカントによる想像力への注目、さらに想像力を重視するロマン主義の芸術運動へと展開している。理想を描き出す想像力の働きは、現実批判にも結び付いたと指摘しているように、時代を単に追うのではなく、大きな流れをもっており、思想への導入としても練られたリード文である。西洋近代思想を中心として網羅的に目配りしている。全体に誤りの選択肢もそれぞれの思想内容が明確に描かれており、手堅く作られている。全体に標準的な難易度の問題である。

問1 パウロ、アウグスティヌス、イエスが人間の欲望についてどう考えたかを問う設問である。アの「福音への信仰」は正解ではあるが、受験者にはなじみのない表現ではなかったか。イはアウグスティヌスの自由意思への理解、ウもイエスの教えについての深い理解が問われている。正誤を3つ組み合わせて解答する設問は、受験者にとって出題形式自体が困難である上に、この設問は各文章の正誤判別も簡単とは言えない。難しい設問であると言える。

問2 トマス・モアの『ユートピア』の内容を問う設問であるが、「囲い込み」というキーワードがある。また、アダム・スミスの自由放任主義、マキャヴェリの権謀術数主義、ホッブズのリヴァイアサンなど、誤りの選択肢の思想内容も明確であり、消去法でも解くことができる。平易な難易度の設問である。

問3 ストア派に関する基礎的な知識を問う設問である。個別には平易な設問だが、2問両方正解できなければならない形式が、難易度を少し押し上げている。標準的な難易度の設問である。

問4 カントの著作名や内容について問う設問である。授業では、カントの三批判書のうち『純粋理性批判』『実践理性批判』は扱っても、『判断力批判』に触れることは少ない。またサルトルの『弁証法的理性批判』についても同様である。やや難しい難易度の設問である。

問5 ゲーテの『箴言と省察』からの資料をもとに、芸術家の創作活動について問う設問である。やや読解力だけで解けてしまうきらいもあるが、自然の中の美しいものの相互の結びつきを発見することで芸術作品を生み出すという、資料の趣旨を的確につかむことを求めるよくできた設問である。標準的な難易度の設問である。

問6 ルソー、キルケゴール、デューイの3人の思想を問う組合せ問題である。ルソーの「自然に帰れ」、キルケゴールの「単独者」、デューイの「創造的知性」などの理解を問うものである。3人の内2人の思想家が分かれば正解できる設問であり、難化しがちな組合せ問題であるが、標準的な難易度の設問である。

問7 リード文の趣旨から結論を推測させる設問である。それぞれの選択肢が、AだからBで

あるという、趣旨のまとめ(A)とそこから下される結論(B)という構造になっており、受験者の判断を導く工夫がなされている。誤りの部分が明確であり標準的な難易度の設問である。

第4問 「戦後日本の政治や経済の仕組み」について

戦後日本を支えた政治や経済の仕組みについて問う、政治分野と経済分野の融合問題である。リード文は、多くの事象を網羅しようとし抽象的なものになっている。出題範囲も広く難しいとは思うのだが、さらなる工夫をお願いしたい。全体的に、やや易しい問題が多い。

問1 行政の制度と公務員について問う問題である。行政委員会についての知識を問う標準的な問題である。

問2 国民と法の関わりについて問う問題である。様々な角度から社会と関わりのある法制度について問う良問である。難易度は標準的である。

問3 日本の国際収支について問う問題である。近年、貿易収支が赤字になったことや、経常収支の黒字は所得収支が支えているという時事的な知識を、資料を用いて問う良問である。難易度は標準的である。

問4 環境保護についての法制度と裁判について基礎的な知識を問う問題である。やや平易な問題である。

問5 EU（欧州連合）について基礎的な知識を問う、平易な問題である。

問6 難民について問う問題である。難民の定義についてしっかりと学習していれば正答を導き出せる、標準的な問題である。

第5問 「経済のグローバル化と格差問題」について

学生AとBの二人による会話文形式のリード文からなる経済分野の問題である。リーマンショック以降の世界経済を題材に、グローバル化によって引き起こされる諸課題を、幅広く指摘したリード文からは、出題者の高い見識がうかがえる。各設問はやや平易な設問が多く出題されている。

問1 日本における年金制度について問う問題である。時事的な選択肢もあるが、基礎的な知識を問う、標準的な問題である。

問2 経済主体について問う問題である。基礎的な知識を問う、標準的な問題である。

問3 各国の所得格差について問う資料を活用した問題である。単純に読み取るだけで正答を導き出せる、やや平易な問題である。

問4 金融政策について問う問題である。マネーストックの正確な理解が求められている。基準割引率および基準貸付利率という語句は教科書で扱われているが、受験者にとってはなじみの薄いものであったと思われる。難易度は標準的である。

問5 需給曲線のシフト要因について問う問題である。単純な知識だけではなく、需要曲線と供給曲線のどちらに影響するかを考えさせる、思考力を問う良問である。難易度はやや平易である。

問6 日本における株式会社について、基礎的な知識を問う、標準的な問題である。

問7 営利を目的としない経済主体の活動について問う問題である。誤文が明らかにわかるもので、やや平易な問題である。

第6問 「日本国憲法と政治制度」について

日本国憲法制定による変革と戦後の政治体制の課題に関する政治分野の問題である。現在、憲法改正が議論になりつつあるなかで、制度改革を構想する場合も憲法の意義を忘れてはいけないというリード文は社会の課題を的確に捉えており、受験者にしっかりと読んでもらいたいものである。思考・判断や資料活用を問う設問がバランス良く配置されている。

問1 憲法と天皇の関係について問う問題である。③は皇室典範の知識が必要であり、やや難しい問題である。

問2 国民主権について、基礎的な知識を問う、標準的な問題である。

問3 選挙制度について問う問題である。資料を活用し、小選挙区制と比例代表制の場合を比較させながら思考・判断させる非常に工夫された良問である。このように単に知識を問うだけではなく、知識を活用する問題を今後も出題していただくことを強く希望する。難易度は標準的である。

問4 帝国議会と国会について問う問題である。知識を問う問題であるが、明治憲法下の知識がしっかりと身につけていないと、やや難しい問題である。選択肢を増やす工夫がなされているが、明らかに不適当なものを除けばむしろ選択肢は少なくなっている。

問5 国政選挙の投票率について問う標準的な問題である。参議院の投票率が衆議院より低いこと、消費税が導入された時期、小選挙区制が導入された時期をしっかりと学習することが受験者に求められている。難易度は標準的である。

問6 違憲立法審査権について問う応用的な問題である。違憲立法審査権の積極的な行使について各選択肢の内容から思考・判断させるやや難しい問題である。じっくりと思考させたいという意図はよく理解できるが、選択肢の内容が題意と若干ずれている。さらなる工夫をお願いしたい。

問7 日米安全保障条約について、基礎的な知識を問う、標準的な問題である。

3 試験問題の分量・程度等について

「倫政」の本試験は昨年度と同様、大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3問ずつ出題された。設問は「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問で、50点ずつの配点も変わっていない。

「倫理」分野では、本試験の大問4問の中から、第2問を除く3問のリード文を使用し、そこへ関連のある設問を結びつけた形式で出題された。設問は、基礎的な人名や用語、基本的な概念に関する理解、さらには基礎的な知識をもとに思考力・応答力についても出題され、各分野のバランスがとれていた。さらに、第2問の問1において『春秋繁露』を読み、天災について問う設問があるが、これは「倫理、政治・経済」単独の設問である。「倫理」分野全体としての難易度は、標準的なものである。

「政治・経済」分野の問題は、教科書に基づく基礎的な知識を問う問題を中心に、グラフや資料から判断する応用力や思考力を問う問題を織り込んだ作りになっており、分量は適切であった。問題配分及び配点については、政治分野が11問27点、経済分野が9問23点となり、昨年度と同様であった。総合的には、おおむねバランスが取れていると言える。基礎と応用というレベルの分類では、基礎的な問題を重視した構成となっているが、やや易しい問題が抽出されており、難易度につ

いて検討の余地があると思われる。

「倫政」については一昨年度新たに設けられた科目であり、「倫理」と「政治・経済」の2科目からの出題ということで、各科目の内容や分量、解答時間配分などのバランスを取ることが難しかったと思われる。受験者数は、昨年度は増加したものの、今年度は減少したが、それぞれの科目の特長を生かした出題となるよう、今後とも一層の工夫と努力をお願いしたい。

4 試験問題の表現・形式について

設問数は、大問数6、設問数39であった。2点と3点を組み合わせた配点となっている。大問は第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。設問数および解答数は「倫理」分野が19問、「政治・経済」分野が20問とほぼ同数であり、配点は50点ずつであった。なお問題形式や配点の一覧表は資料として最後に掲載した。

「倫理」分野は、「倫理」の「青年期・現代社会」と「日本の思想」と「西洋近現代思想」のリード文と設問の一部が転用されたが、第2問の問1は「倫理、政治・経済」のみのオリジナル問題であった。後に示した資料の通り、用語や人名等についての知識を問うものがやや増えた印象であるが、基礎的・基本的な概念などについての理解を問うもの、総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの、それぞれの分量のバランスが取れた設問であった。また、各設問の表現については、受験者が十分に理解できる適切なものであった。

「政治・経済」分野の第4問のリード文は「倫政」オリジナルのものだが、設問は「政治・経済」の第1問から4問、第5問から2問ずつ抽出され出題された。政治分野と経済分野の融合問題であったが、リード文の内容が幅広く抽象的であったため、メッセージ性が弱いものとなってしまった。

第5問は「政治・経済」の第3問が、第6問は「政治・経済」の第4問が、リード文・設問ともにそのまま用いられた。リード文は、各大問とも分かりやすく、政治や経済の諸問題に対する意識を高め、関心を喚起する良文である。第5問の問3では提示された資料を活用し、思考や判断を行った結果として正答を導き出すという良問であり、昨年度の課題を踏まえた工夫がなされていた。今後も単なる知識や理解で導き出すことができる問題から、より思考力や判断力を問う問題への改善が進められることを期待したい。

グラフや資料を用いて正答を導く設問が2問、思考力や応用力を問う問題が3問出題された。このような問題は、単に基礎的な知識の暗記量だけを問うのではなく、多面的・多角的に考察させる良質な問題であった。今後もこのような問題が作成されることを希望する。

5 要 約（総括的な評価）

リード文及びすべての設問について逐一検討してきた。個々の設問に対する評価は前述のとおりであるが、出題方法、配点については、全体的にバランスよく出題されていた。

(1) 「倫理」分野

各リード文及び資料文は、全体的に倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、メッセージ性を持つもので、「倫理」を学んできた受験者を大いに啓発するものであった。リード文においては、昨年同様、第1問において会話文が採用された。昨年の会話文は3人の発話者の会話で、

それぞれの意見を読み取る作業が煩雑であった。しかし、本年度は2人の発話者の会話であり、受験者を惑わせることはなかったと思われる。会話をリード文として使う場合には、今回のような分かりやすい構成のものにしていきたい。資料問題については、「倫理、政治・経済」独自の問題である董仲舒『春秋繁露』からの引用文が、中国思想の本質的部分を受験者に読解させるという工夫の感じられる良問であった。今後も日常生活に関連し、受験者が主体的に人生や世界について考察することを促すような出題を意図していきたい。

設問については、基礎的・基本的な知識や概念の理解を問うものや、思考力、判断力、応用力を問うものなど全体的によく工夫され、全体として標準的な難易度だった。本試験の「倫理」の問題と共通の問題には難しい設問が少なかったため、「倫政」の平均点の上昇につながったと考えられる。

(2) 「政治・経済」分野

学習指導要領で、高等学校教育に求められている内容に沿って、広範囲に出題されている。全体として、知識を用いて正答を導き出す問題が多かった。グラフや資料を用いて正答を導く設問が2問、思考力や応用力を問う問題が3問出題されているが、全体としてももう少し思考力や応用力を問う問題や時事的な問題が増加しても良いと考える。今後も重要な知識や出来事、概念の理解を問うことを重視しつつも、思考的・分析的な力を問う形の応用問題を更に充実させていくことを希望する。

リード文は、第5問、第6問が時事的な問題に触れており、現代の社会問題を考えさせるものであった。単に知識を暗記するのではなく、それぞれの事象が「どのような状況の中で」「どのような経緯で」起きたのかを把握させる重要性について提起しており、「政治・経済」を学習する意味について述べており、高く評価できる。このようなリード文の作成を今後もお願いしたい。

センター試験は、単に選抜のための学力評価だけでなく、高等学校教育の在り方に対する重要な指針となり、高等学校の「政治・経済」の授業内容や指導の在り方を方向づける大きな役割を担っている。よって、今後とも、学習指導要領に基づく基礎的な知識や概念の理解を問うことに重点を置きつつ、時事的問題や資料を用いて多面的・多角的に考察させる良質な問題の作成を、今後とも期待するものである。

※資料

「倫理」分野

主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	第1問 第2問	問4(3) 問3(2)	第3問	問3(2) 問4(2)	計4問 9点
主に基礎的・基本的な概念等についての理解を問うもの	第1問 第2問	問1(3) 問2(3) 問5(2) 問2(2) 問4(2)	第3問	問5(3) 問6(3) 問1(3) 問2(2) 問6(3)	計10問 26点
主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの	第1問 第2問	問3(3) 問1(3) 問7(3)	第3問	問5(3) 問7(3)	計5問 15点

「政治・経済」分野

注：() 内の数字は配点、また*印は基本的な問題と判断されたものである。

主に教科書に基づく知識により正解が得られる問題	第4問 第5問	問1(2)* 問2(3)* 問4(2)* 問5(2)* 問6(2)* 問1(2)* 問2(3)* 問4(2)* 問6(2)* 問7(3)*	第6問	問1(3)* 問2(2)* 問4(2)* 問7(2)*	計14問 32点
主として教科書に基づく知識を使って思考力や応用力により正解を導く問題	第5問 第6問 第6問	問5(3)* 問3(3)* 問6(3)			計3問 9点
主として時事的・社会的な知識から国内的・国際的な諸課題を考えさせる問題	第4問	問3(3)*			計1問 3点
資料やグラフ・図表などを使って理解力・分析力を問う問題	第5問 第6問	問3(3)* 問5(3)*			計2問 6点